

論

説

岸田文雄首相が率いた宏池会は、池田勇人、大平正芳、鈴木善幸、宮澤喜一と5人の宰相を輩出した。その保守本流もパーティー収入の不正処理問題で解散し、66年の歴史を閉じた。

岸田首相は、新しい資本主義と大幅賃上げを打ち上げた際、初代会長による高度経済成長戦略と所得倍増を意識したに違いない。

宮武剛

派閥とカネ

1960年6月「アンポの幻想に絡め取られ」「所略」いかにも元大蔵省の官得倍増こそ戦後最大のコピライティングだったと認められた。しかし、国を二分する大混乱の責任を取って岸信介首相は退陣した。池田は「日本経済は復興期から勃興期にある」「賃金を2倍、3倍にするのも夢ではない」とぶち上げた。理論面の支えが大蔵省の後輩、下村治（たむら）で、日本はすでに力強い成長力を持ち、急逝した。

田村は満州国へ出向し、敗戦時に捕虜でシベリアへ連行・抑留された。先妻は心労で病死したという。下村は結核で戦争末期は休職、戦後は閑職の調査課から再出発した。独自の分析で、圧倒的多数派の「安定成長論」を論破した。「奇病と闘い、捕虜生活

政策集団の誇りはどこへ

いわば政治から経済へ劇的に民間の設備投資こそが生産性の向上や経済の高度化を加速すると説いた。田村は満州国へ出向し、敗戦時に捕虜でシベリアへ連行・抑留された。先妻は心労で病死したという。下村は結核で戦争末期は休職、戦後は閑職の調査課から再出発した。独自の分析で、圧倒的多数派の「安定成長論」を論破した。「奇病と闘い、捕虜生活

「アンポ反対」を叫んだ池会の初代事務局長を務めた。機関誌「進路」を創刊、社会主義批判や経済成長戦略の論陣を張った。「政治資金は田村が管理した（中

みやたけ・ごう NPO法人福祉
フォーラム・ジャパン副会長、学校
法人・社会医学技術学院顧問

「奇病と闘い、捕虜生活」(文中敬称略、本誌論説委員)